



目 次

○理系分館検討小委員会報告について	
理系分館検討小委員会委員長 鵜飼隆好…… 1	
○理系分館検討小委員会報告…… 2	
○随筆にみる低温科学研究所	
低温科学研究所図書掛 藤島 隆…… 7	
○附属図書館の課の名称変更について…… 9	
○資料紹介	
くワイマール期ドイツ保守革命	
—アルミン・モーラー文庫—について	
法学部教授 今井弘道……10	
	ゲルシンスキ文庫 (The Henryk Gierszynski Collection)
	スラブ研究センター教授 伊東孝之……11
	○北の古典籍 ③ 秋月俊幸……12
	○会 議……14
	○電算化ニュース……15
	○受贈図書……17
	○人事往来……17

理系分館検討小委員会報告について

理系分館検討小委員会 委員長 鵜飼 隆 好

第二中央図書館、あるいは自然科学系図書館というような名称を掲げて、いくつかの大学でもいわゆる理系図書館の設置構想が練られている。本学においても、先に提出された図書館の将来計画中間報告の中で初めて提案されたが、その拠る所の一つは、現附属図書館が人文・社会科学系の研究・学習用図書館として機能することを将来的に期待しているからである。

中間報告による提案をもとに、第133回図書館委員会において、理系図書館(分館)が持つべき機能と形態について、第1段階の検討を行うための小委員会が設けられ、検討を開始した。理系部局のみの図書館委員をメンバーとしたために偏った議論と見られなくもないが、理系といっても部局単位で簡単に分類出来るものではなく、部局の中でもさらに物理系、生物系とに分けられるとか、部局にまたがって共通とみられる系がある場合でも図書館(室)の運営方法が大きく異なる状況にあることから、細かい事項についてはいろいろな立場から幅のある議論が行われており、その意味では平均的な形に納まったともいえる。部局図書室運営方法の多様性を考えるとき、現在のサービスが理系分館の設置により利用者にとって一方的に減ることのないような形態を作っていかなければならないから、画一的な結論には到達出来ない性質のものである。

委員会として確認したことは、図書館の機能が確実に変わってきていること、その変わり様が今までの機能を否定するものではなく、重点がシフトした形で変わってきていること、現

実における関連予算の低減と、一方では境界領域、あるいは新分野の展開のために新たな経費がかかり、現実の問題として更に効率的な予算の運用を行わなければならないこと、一方、理系分館が実現すればその効果として、例えば図書資料の重複購入の回避や校費購入図書の私蔵本化の傾向が弱められることから予算の効率的な運用を計ることが出来るし、機能の一つである資料情報の検索サービスについても、担当者がある程度専門化することにより質の良いサービスが期待出来ること、その他夜間開館のための予算申請が可能とか色々の期待が寄せられる等々である。

系別理系図書館の形態についての議論の中では、分類の仕方に水産・農系、理・工系と医系分館の3つに分ける方法もあり、この方が分野として明確であるとのご意見もあったが、水産学部が別キャンパスにあるという本学の実状を考慮して原案を提示することにした。

本学附属図書館に関して今一つの特殊性としては教養分館の存在である。もとより教養分館は理系分館とは全く関わりのない存在ではあるが、理系分館の計画に際し、併せて教養分館の設備をも充実することができるならば一石二鳥であろう。教養分館に隣接して理系分館を建設することによって、両者の機能と施設を、少ない予算でより充実することが可能なら検討してみるのも一案であろうとの意向だった。しかし、現教養分館が本来の使命を損なうことがあってはならないから慎重な論議が行われることが必要である。

このように項目の一つ一つが必ずしも完全ではないが、理系分館としてはどのような機能が必要であろうか、どのような形態のものが考えられるかについて最初の案を作ることができた。現在行っている各部局学科の図書室業務サービスや施設の関係がどう位置付けられるのか、ある程度の統合に伴う職員の配置などを含め、分館設置の具体化にはさらに多くの論議とコンセンサスが必要である。

短い時間ではあったが、ご多忙のなかを熱心にご議論いただいた小委員会メンバーならびに事務局の皆様に感謝するとともに、理系分館設置の青写真が早期にでき上がることを切に願う次第である。

(工学部教授)

理系分館検討小委員会報告

(昭和63年3月17日)

1. 理念ならびに経過説明
2. 理系分館案
 - 2.1. 理系分館として備えなければならない機能
 - 2.1.1. 図書ならびに情報に関する機能
 - (イ) 境界領域、共通領域の図書・雑誌類の収集調整
 - (ロ) 科学・技術関係の参考調査機能
 - (ハ) 情報センター機能
 - (ニ) 複写センター機能
 - (ホ) 異分野の基礎的学習用図書館機能
 - (ヘ) 保存図書館的機能
 - 2.1.2. 閲覧室および運用上必要な機能
 - (イ) 研究閲覧(討論)室の充実
 - (ロ) 夜間開館によるサービスの向上
 - 2.1.3. 建築位置
 - 2.1.4. 床面積
 - 2.2. 理系分館の種類 規模と構成

- 2.2.1. 第1案 自然科学系全体で一つの分館を作る案
- 2.2.2. 第2案 系別理系分館案(部局別, 地域別グルーピングを考慮したもの)
- 2.2.3. 第3案 特別な本体を持たない緩い繋がりとしての組織
- 2.2.4. 第4案 現教養分館の拡張と理系分館機能の付与案
- 付1 長期的展望としての提言——附属図書館を新設する案
- 付2 検討小委員会の審議
検討小委員会委員名簿

1. 理念ならびに経過説明

昭和62年3月, 第132回図書館委員会に答申された『北海道大学図書館の将来計画に関する中間報告』の中に取り上げられた理系分館について, その可能性と構想を検討する小委員会が設けられた。

小委員会においては一つの成案に絞ることはせず, いくつかの可能と考えられる案を図書館委員会に提示してご検討を願うことにした。

近年, 図書館のあり方には変化がみとめられている。一般に, 図書館は教育研究に対して基本的文献を提供することを第1とするが, 最近の高度情報化データベースの発展に伴い, 総合的リファレンスセンター, 資料保存センター, また, 文献交流センターとしての機能が大きく要求されてきている。特に理系(農学・工学・理学・医学・歯学・薬学・水産学・獣医学等)においてその傾向は強く, 従来のような閲覧・保存機能を中心とする形態の図書館から脱皮して情報センター的な機能が大きなウェイトを占めるようになりつつある。

また, 大学図書館が発展して全体規模が巨大化してくると, 機能分散と管理集中の調和を求める上でいくつかの問題が提起されてくる。例えば, 資料の重複と一方では欠如, サービスの悪化, サービス網の断絶, 人事の停滞といったことがそれである。

教育と研究の遂行に貢献する図書館の機能として, 自然科学系の図書館は利用される資料の形態, 収集の範囲, 利用方法と提供方法に, 従来の図書館機能に比べかなりの相違点が見られるのは事実であり, 従って, 担当職員が要求される業務の知識におのずから相違が出てくることも予想される。

文系・理系それぞれの特長を生かした効率的な図書館を考えると, 本学の場合, 人文・社会科学系分野を対象とした図書館とは別に, 新たに自然科学系を中心とする第二の図書館(以下理系図書館(分館)と称する)を設けることについて検討すべきである。ただし, この場合現状における学部図書室, 学科図書室等の機能ならびにサービスを否定するものではなく, 理系図書館は資料情報の交換に利便性が高い新しい付加価値を持った機能を中心とし, あわせて多くの分野にまたがると思われる書籍・資料の保存センターとして機能することが望まれる。さらに, 将来必要により多様な機能を付加していくことのできる, 柔軟性のある形態を持つものであることが望ましい。これら両系列の図書館が存在することによって, それぞれがより適切なサービスを行なうことができるばかりでなく, 閲覧スペースのより有効な使用法, 例えば一時的なプロジェクトを対象とする主題別研究閲覧(討論)室を設けることも可能となろう。

2. 理系分館案

2.1. 理系分館として備えなければならない機能

2.1.1. 図書ならびに情報に関する機能

(イ) 境界領域, 共通領域の図書・雑誌類の収集調整

境界領域, 共通領域の図書は, 関係ある分野の幾つかで重複する傾向があり, 余分の労力

と予算を必要とする。テーマによって、その都度部局の組合せが変わることもあるから、部局間の調整は是非とも必要である。

(ロ) 科学・技術関係の参考調査機能

莫大な量になるであろう科学・技術系の用語辞典、年鑑、ハンドブック、要覧、数値表等、頻繁には使わないが必要であるような参考図書は、体系的・網羅的に整備する必要がある。特に二次資料（書誌、目録、索引、抄録等）、シソーラス（検索語辞典等）に容易くアクセスできるようにしてリファレンス質問に備える。

(ハ) 情報センター機能

これからの図書館の形態を象徴するものであり、特に理系におけるように日毎に情報を追いつめる分野においては、情報の入出力機能を完備しておかなければならない。幸いにして北大独自の LAN も実現間近であり、従来と異なったサービスが提供できる。

まず最初に学内に用意するデータベースの充実を図るが、一方、国内の大学間の情報交換のほか、民間データベースへのアクセス、さらには、国外の大学、研究機能などが備えるデータベースへ自由なアクセスを可能にしなければならない。

(ニ) 複写センター機能

雑誌を中心にある程度集中管理を進めるための条件としては、かなり自由に、また簡単に複写が得られ、あるいはファクシミリによって電送するようなことも出来なければならない。

(ホ) 異分野の基礎的学習用図書館機能

科学技術系の基礎的図書を集中して備える。複合した分野を研究しようとする学生や初級研究者にとって他分野へのアクセスのための図書や文献を個々に購入することは不経済であり、図書館としてまとめて備える必要がある。また、学生や初級研究者が必要とする学習・研究の目的に応じた図書が、自由・的確に取り出せるような参考業務サービスが必要であり、学内における関連分野の教官の協力によって、検索のためのガイドブックを作ることができれば、学生に対してだけでなく他分野の研究者にとっても有用であろう。

(ヘ) 保存図書館的機能

自然科学系では古い図書・雑誌については全学で一部だけ保存されればよく、部局毎に収蔵しなくてもよい。本計画による分館ができた場合、該当する図書・雑誌類を各部局から供出して取捨し、少なくとも一揃いだけは保存する。この場合欠号のものは購入・交換等によって補充する。

2.1.2. 閲覧室および運用上必要な機能

(イ) 研究閲覧（討論）室の充実

先に述べたように、図書館は単に資料の保存庫、情報の手入場所としての存在ではなくなりつつある。検索した情報を基に、異分野の研究者がある程度の意見交換、討論を行うことが出来るような、いわば異分野研究室とでもいう部屋が用意され、期間を区切って自由に利用することが出来れば便利である。閲覧に際してある程度討論を行っても支障のないよう、防音設備の整った部屋をいくつか用意するのがよい。新しいプロジェクトを設けた分野についての関連図書を、一定期間集約し、研究者にとって利用しやすいようにする。

(ロ) 夜間開館によるサービスの向上

ある程度の不便を承知で資料の集中管理がされる以上、その見返りとしてかなり自由に、かつ時間に制限なく文献を読み、討論、学習が出来るのであれば、例え場所的に離れていても利用者の理解が得られよう。そのためにも夜間開館は是非とも実現したい。と同時に学内外の

文献情報検索サービスについても出来るだけ長時間の利用サービスを行う。職員の不足は ID カードの利用により補うなどの検討を含め、利用者サービスの向上に努める。

2.1.3. 建築位置

理系図書館であることを考えると、理系の関連学部から遠くないところに位置することが望まれる。広大な敷地を有する本学においては、北キャンパス、南キャンパスと二分する取り扱いをされることが多いが、この方式に従うと北キャンパスの一部に位置することが妥当であろう。

2.1.4. 床面積

図書館としての形態にはあるパターンが受け継がれてきたが、近年における機能の変化、あるいは文系・理系におけるサービス業務の相違を十分考慮して決めなければならない。冬期間の厳寒時を考えた構造とし、かつエネルギー的に無駄のない建物であり、情報化時代に即応したインテリジェント要素を備えたものが望まれる。初期規模として 4 階建約 5,000 m² 程度を有し、将来の面積増に対処できるような構造にする。

事務管理、会議室、研修室、ロビー部分

情報検索サービス、複写サービス、システム研究部分

学習用閲覧室、小閲覧室、研究用小閲覧室部分

保存書庫部分

2.2. 理系分館の種類 規模と構成

上述した幾つかの機能を満たすような理系分館の形態について検討した結果、次のようにまとめることができた。

以下の案のうち必ずしもどれか一つを選ぶのではなくてもよく、最終的な姿として第 1 案が望ましいことは勿論であるが、第 3 案、第 2 案の順で段階的に機能を充実していくことも可能と考える。即ち、第 1 ステップとして、現在の学部・学科図書室の機能、サービスをベースとし、重点図書室を中心として幾つかの部局図書室が、そのままの形で連携を進めることが出来る第 3 案のような形からスタートすることも可能である。次に、第 3 案よりさらにまとまった形として位置付けられる第 2 案は、現在既に行われているようなメディカル系の部分的連携のように、専門の近い幾つかの部局や分野の共同運営が発展したものである。現在進行中の各部局の将来計画を利用して、関連部局間の連携を図ることも可能であろう。

理系分館として一番望まれる形は第 1 案であり、考えられる全ての機能を満たしているものである。

現在北キャンパスには教養分館がある。その機能は主として学習用図書館であるから、本構想の理系分館とは本質的に異なるものではあるが、例えばそこに隣接して理系分館を建て、お互いに機能を高めることもあり得るという案が第 4 案である。また、理系分館を検討する段階で附属図書館そのものについての意見も出されたが、これについては改めて検討する必要があると考えられたので、長期的展望として付言した。

2.2.1. 第 1 案 自然科学系全体で 1 つの分館を作る案

望ましい形ではあるが、実現のためには段階をふむ必要もあろう。

2.2.2. 第 2 案 部局のグルーピング・地域別を考慮した理系分館案

○水産分館（水産学部）

○理工農分館（理学部、工学部、農学部、応用電気研究所、触媒研究所、低温科学研究所、環境科学研究科等）

○医学分館（医学部，医学部附属病院，歯学部，歯学部附属病院，薬学部，獣医学部，免疫科学研究所，医療技術短期大学部等）

自然系学部を分ける分け方の例として，物理系，化学系，生物系，ならびに医学系の4つがある。また，本学の場合では，キャンパスの離れた水産系を別途考慮し，理工農系，水産系ならびに医学系の3つの系別理系分館を考える方法もある。

しかし，前者の場合は部局単位そのものであり，境界領域の研究に対して必ずしも有効とはいえず，寧ろ組織が交錯してデメリットの方が多い。一方，後者ではこの危惧は薄められて，新しい分野に対する対応は改善されようが，分館を建てる位置が問題となり調整が難しい。学際的研究が中心となっている昨今の状況をみれば，一つのあり方といえよう。

2.2.3. 第3案 特別な本体を持たない緩い繋がりとしての組織

理系分館を設ける場合，一般には建物，組織を確立したうえで成り立つ方法を考えるが，目的からいえば必ずしも大きな建物がなくても良い。現在の部局図書室は全くそのままの形で存続し，重点図書室を中心にして太いネットワークで結ぶことにより，自由に検索やコピーができ，ディスプレイ閲覧が可能であるような機能が備えられることで，今少し効率的に運用出来れば良いとする案である。

2.2.4. 第4案 現教養分館の拡張と理系分館機能の付与案

現教養分館は，教養部学生のための学習用図書館機能を主な目的として昭和44年12月に完成したが，以後学生の増加に備えて増築を行い，昭和52年7月完成し，現在4階建て4,700m²の規模を持つ。一般閲覧室，開架閲覧室，ビデオ視聴室，語学演習室，会議室等を持ち，約145,000冊の蔵書を収容可能な7層の書庫を備えている。利用状況は昭和61年度34万人の入館者を数え，45年18万人の約2倍を数えるに至った。これは1日平均1,165人になる。さらに夜間開館による利用者は，約64,200人で1日289人が利用している。

一方，問題点は教育学習用として一応の体制は整えているが，参考図書，視聴覚資料等については，逐次に整備されてきたとはいえなお十全でなく，一層の充実が願われている。また教養部学生の増加への対応，および近く予想される書庫容量不足にも問題がある。

利用者の内訳を調べてみると，教養部学生が多いのは勿論であるが，最近では近くにある医学部，歯学部，工学部，理学部，獣医学部等の学生や院生が，他分野の研究へのアクセスのために，基礎的学習用図書館として利用する姿が目立ってきている。

夜間開館，演習室利用等について言及すれば，恒常的職員不足のため十分な利用者サービスも出来ない状態であり，さらに文献検索学内ネットワークを利用する端末機についても数が少なく十分でない。

以上のような現状を踏まえた上で，なお教養部内における十分なる検討を経て，全学的な検討が加えられるならば，現教養分館に隣接する形で理系分館を建設し，北キャンパス図書館としての新編成を計ることも可能であると思われる。

付1. 長期的展望としての提言——附属図書館を新設する案

本学附属図書館の建物は，その構造が甚だ機能的でなく，これからの図書館の新しい役割を果たしていくのに適当とはいえない。新しい附属図書館の機能の中心は莫大な情報量を効率的に処理することであり，いわば『北海道大学中央情報センター』とでも称するものとなろう。その組織および建物については今後十分な検討が必要であると考えられる。

付 2. 検討小委員会の審議

第 1 回会議	昭和 62 年 6 月 18 日
第 2 回会議	昭和 62 年 7 月 20 日
第 3 回会議	昭和 62 年 8 月 13 日
第 4 回会議	昭和 63 年 1 月 6 日
第 5 回会議	昭和 63 年 2 月 9 日

検討小委員会委員名簿

委 員 長	工 学 部	教 授	鵜 飼 隆 好
委 員	医 学 部	教 授	菅 野 盛 夫
委 員	農 学 部	教 授	森 樊 須
委 員	水 産 学 部	教 授	高 木 徹
委 員	免疫科学研究所	教 授	東 市 郎
委 員	附属図書館長	教 授	大 野 公 男
委 員	附属図書館教養分館長	教 授	高 田 誠 二

随筆にみる低温科学研究所

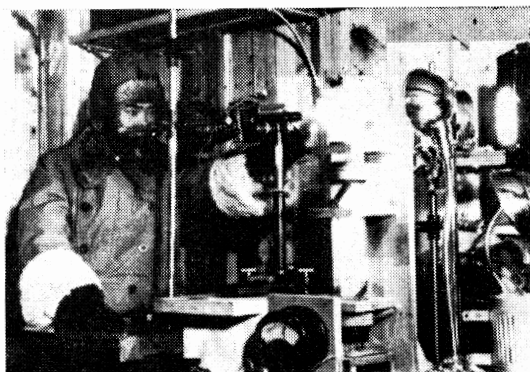
低温科学研究所図書掛



明るい部屋を一通り見終つて、今度は準備室といふのにはいつた。毛皮裏の外套、帽子で身をかためた面々が、零下十五度といふその部屋で、しばらく寒さに馴れるのである。……五分経つて、いよいよ低温室へはいつた。

窓も何もない四角な箱のやうな部屋の中は、そつちもこつちも天井へ届くまで高く、黒い幕でおほはれた、多分電気の装置であらう、黒いお化けのやうなもので一杯になつてゐて、人間どもはその狭いあひだを縫ふやうにして歩くのである。

「この中で、どうかすると四時間もある事があります」と云ひながら、博士は兎の腹毛についた人工雪を、ピンセットのさきにつまんで、向ふ側の黒い幕のかげから出て来られた。一寸たらずの細い毛に、お雛さまのやうらくのやうなちひさな水を顕微鏡へ入れて上からのぞくと、やつと三分角ぐらゐの雪の形が、くつきりと実にうつくしい六花の形で、水いろしてすぎとほつて、しんとしてゐる。



低温室の中谷宇吉郎教授
(「人工雪誕生の地」より)

これは森田たまの随筆集『針線餘事』共立書房、昭和23年刊に収められた「ふるさとの雪」の一部分である。この中で、18年ぶりで北海道へ行った、と森田たまは言っているのだが、手元には資料がないので、何年のことか確認していない。おそらく昭和15年か18年のどちらかのようなのだ。ただ孫野長治氏の「低温室の思い出」の中に、「大事な来客用の雪製作は花鳥さんの役だった。森田たま夫妻や谷川徹三など一行の防寒服をまとった記念写真がある。『さすが森田たま女史だ。防寒服を着ながら品をつくっている』と感嘆されたことを記憶している」とある。これは常時低温研究室（低温科学研究所が出来てからは同所分室となった）の思い出であるが、政治家や文化人などたくさんの人々がここを訪れている。このときは森田たま夫妻の他に谷川徹三、阿部知二が一緒であったらしい。

はじめて人工雪が作られたのは昭和11年3月のことで、中谷宇吉郎は実験室の中で雪の結晶を作ることを考え、水蒸気を送って、よく乾燥したウサギの細い毛に結晶を付けて成長させることに成功した。雪の核を付ける素材としていろいろな動物の毛を試したが、結局兎の毛がいちばんよかったという。「そのちひさな一片の雪の奥に、果しなくひろい氷の宮殿を見るように思った」と森田たまは、顕微鏡をのぞいて六花の雪の結晶をみたときの感動を綴っている。



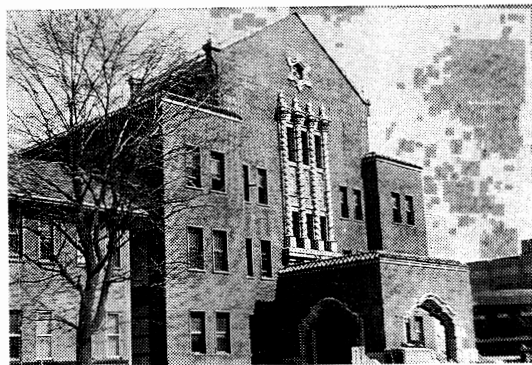
今度北海道帝大に出来た低温科学研究所は、その予算が一昨年通過し、爾来北大構内にその建築が進行中であつた。

そして昨年暮に至つて、その建築が外郭だけ一応完成したのであるが、その時教授四名、助教授三名の官制発布を見て、名実共に、この特殊の意義ある研究所の設立を見たのである。研究員の定員は以上がその第一期の発表で、続いて教授二名の補充をして全部で六部門とし、低温科学の各方面の研究に従事することになつてゐる。

該研究所は、総経費一二三萬円をもつて設立され、建築一二〇〇坪、低温室四室、低温風洞一室より成る大規模な研究所である。

寺田寅彦に師事した中谷は、多くの随筆を残している。それらを一つ一つみたわけではないけれども、昭和18年甲鳥書林から出版された『樹氷の世界』の中に、「低温科学研究所」という随筆があつて、ここに引いたのはその冒頭部分である。

中谷は昭和16年、「雪に関する研究」により帝国学士院賞を受けた。その年の秋、低温科学研究所の官制が公布され、正式に発足をみた。いままさに我国が太平洋戦争に突入しようとしているときであつた。翌年庁舎の建築がはじまり、所長は理学部長小熊悍が兼務、純生物物理学をはじめ6部門で構成された。その頃すでにソビエトには低温科学研究所があつて、アルトベルクがシベリア開発のための基礎的研究を行っていた。

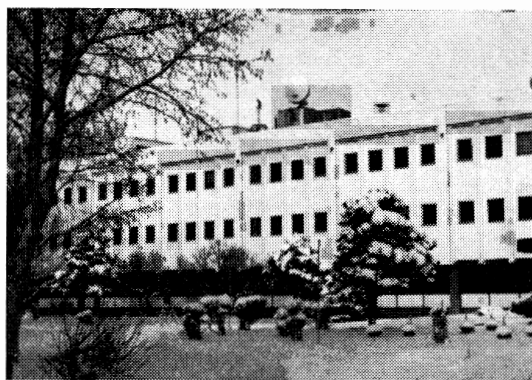


旧低温科学研究所（解体直前）



実に素晴らしい性能の雪氷学研究所ができたものである。小低温室が二四、大低温実験室が二つ、それに大風洞室、水槽実験室などが一、二、三階にあり、中央にフロン冷凍機六台があって、これからマイナス二八度C、マイナス四八度Cの二系統のラインが、パイプで各室に循環するようになっている。各室はそれぞれ任意の低温をたもつことができるしかけである。そのほかマイナス八〇度C、マイナス一〇〇度Cになる超低温槽が三台もあり、またさまざまな新しい実験装置がととのえられている。

もう一つ、極地評論家加納一郎の随筆から紹介しよう。ここに掲げたのは、昭和44年に朝日新聞社から出された『わが雪と氷の回想』の中の、「雪氷遍歴」に収録されているものである。加納は大正5年に北海道帝国大学農学部に入學、恵迪寮に入った。彼が学生時代をすごした恵迪寮は旧低温科学研究所の敷地内に建っていて、「わたしは、そこでスキー三昧の生活をおくり、朝夕、手稲山の雪をながめ、気温をはかったり、雪質の記録をとったりしていた」とその頃を懐かしんでいる。彼は在学中に北大スキー山岳部の創設に加わり、「山とスキー」という雑誌もその頃に生れた。



現低温科学研究所

加納一郎というと「北海道開拓秘録」の監修者とし知らなかったが、ベントレーの業績を日本にはじめて紹介したのは彼であるという。加納は昭和2年来日したアムンゼンの講演を聞いて感銘を受け、以来極地関係の文献の収集と紹介につとめた。昭和61年には教育社より「加納一郎著作集」全5巻が刊行されているし、当研究所図書室には加納文庫268冊が蔵されている。

昭和43年の春、低温科学研究所は現在の地に移った。2月1日に新築落成式が挙行政され、加納はこの式典から帰ってまもなく、世界に誇る雪氷学の研究所を目の当りにみた感激とともにこの随筆を書き起している。

低温科学研究所が設立されてからまもなく半世紀が経とうとしている。(藤 島 隆)

附属図書館の課の名称変更について

昭和63年4月8日付けで、附属図書館の課の名称が次のとおり変更になりましたのでお知らせします。なお、掛の名称は従来のとおりです。

(旧) 整 理 課 → (新) 情 報 管 理 課
 (旧) 閱 覧 課 → (新) 情報サービス課
 (旧) 学 術 情 報 課 → (新) 情報システム課

資料紹介

〈ワイマール期ドイツ保守革命—アルミン・モーラー文庫—〉について

ごく最近、大野達司助手と協力して、ワイマール期の有名な国家学者であるヘルマン・ヘラーの『ビュルガーとブルジョア』というタイトルをもつ論文を翻訳する機会があった。このはなはだ興味深い内容をもつ論文については、間もなく出る筈の『北大法学論集 39 巻 3 号』を御参看願いたい。大よその内容は、一般に「市民」として観念される概念を「ビュルガー」と「ブルジョア」に区別することを通して、ワイマール共和国の前途に不吉な影を投げかけている時代状況を批判的に検討しようとするものだ、このようにいっておいてよいであろう。つまり、ヘラーは、ここで、政治的自己決定・精神的・道徳的自己決定の主体たる「ビュルガー」が死滅し、私的領域内で自己完結する自己利害の内に自閉的・排他的に閉じこもうとする「ブルジョア」が跋扈しはじめてくることによって、民主主義的政治体制それ自体の主体的基盤が崩落しつつあることを剔抉しようとしているのである。この意味において、それは、トーマス・マンの『ブッデンブローック家の人々』に具象化されているような事態を概念的に捉えようとする内容をもっている、といっておくことができるかも知れない。

このヘラーの論文は、通常〈市民社会〉と〈国家〉という対概念を通して問題にされることを、主体の側に即して問題にしようとする観点を提示しようとするものだという意味において興味深いものであったし、また近年の我が国における政治的・法的基盤の動向を〈市民的政治文化〉の可能性というタームによって理解しようとする方向性に対して、中々に示唆深い内容を与えるものであるといえることができる。その意味では、このような観点は、もう少しジックリと掘り下げてみる必要のあるテーマだといわなければならないであろう。

ところで、このようなテーマに関わる時、ただ単に例えば筆者の専攻する法哲学・法思想史というような専門領域内に自閉的・排他的に閉じこもっていることは許されなくなる。文学や大衆文化の動向それ自体が、法哲学的・法思想史的議論の直接的な素材として登場してきてしまうからである。このことは、無論具体的な時代の問題状況のあり方につぶさに触れるためには、不可欠なことであり、一般的には誰でもが了解しているところなのだが、とりわけ外国語を通じて外国の文献に即して研究を進めねばならない者たちにとっては、「行うに難い」はなはだやっかいな問題なのである。日常的にそれぞれの時代の文学作品に触れ、しかもそれをその国の言葉で読んで、専門の問題領域に共通する、あるいはそこにおける問題状況を深部において支えている精神的アトモスフェアを肌で実感するなどということは、余程の覚悟があっても、そう簡単にできることではない。そもそも、ある時代の法思想史を研究する者にとって、その時代の大衆文化まで含めた精神史的動向に通暁するためには、何を、どれだけ読んでいなければならないのか、こういったことを知ることすら、容易ではないのである。そしてこのようなやっかいさは、翻訳の作業それ自体にも常につきまとうものである。

このようなやっかいさは、例えばその国の研究者自身が狭い専門領域に必らずしも属するわけではないどのような本をどれだけ読んだのかを知ることによって大きく軽減される。この意味において、思想史の研究対象たる人物の蔵書目録を見るのが我々にとってどれだけの救いとなることか。このことはあらためていうまでもないところである。

さて、今回、わが北大図書館には、単行本約 5,200 冊、バック・ナンバー約 500 冊を擁する

「アルミン・モーラー (Armin Mohler) 氏蔵書」が入ることとなった。このモーラーなる人物については、筆者はあまり多くを知るところではない。しかし、『ドイツにおける保守革命 1918-1932 (Die konservative Revolution in Deutschland 1918 bis 1932: Grundriss ihrer Weltanschauungen)』(1950)——これはバーゼル大学に 1949 年に提出された氏の博士論文であり、現在でもワイマール共和国における反民主主義思想に関する基本的文献としての位置を保ち続けている。『ワイマール共和国』(亀嶋庸一訳、みすず書房、1970)の著者ピーター・ゲイの文献解題においては、「ドイツ右翼思想の経済的背景に関する非常に包括的な研究」とされている——の著作をもつ 1920 年生まれのスイス人ジャーナリストであり——例えば、ある時期 Die Welt 紙のコラムニストとして執筆していた——、またインスブルック大学で政治学の非常勤講師を勤めていたというような経歴をもっている人のようなものである(現在はミュンヘンで病氣療養中)。エルンスト・ユンガーの秘書を勤めたこともあるという(1949-1952)。このようにジャーナリストとしての感覚と学者としての資質をあわせもち、〈ワイマール期における保守革命〉というようなテーマに取り組んだ著作家が、その作業を行うにあたって用いた蔵書を手にとって見るができるということは、先に述べたような事情との関係においては、誠に有難いことだという他ない。テーマ自体が狭い意味での専門領域にとどまることを許さぬもの、知的・精神的世界と感性的世界の交錯する地点をその奥底にまで踏みこむことを要求するものであるだけに、その感は一としおのものがあるといえることができる。これによって我々は、ワイマール期の思想史研究の懐を深くする可能性を、またその義務を、与えられたわけである。その可能性あるいは義務が、現代のわが国の文化状況・政治状況を見る目をより一層研ぎ澄ませたものにする可能性および義務と表裏一体をなすものであることについても、多くをいう必要はない。

既に図書館で所蔵されているものとの重複などということもありえよう。だが、そのようなことは問題とすべきではない。かような経歴と問題関心をもつ人物が自ら所蔵していた書物が眼前に並べられているのを眺めるだけでも、そして時に散見される欄外の書き込みを見るだけでも、様々の想像力がかき立てられる。そのこと自体が既に、本来は留学でもしない限り得ることのできない貴重な経験であり、鮮烈な学問的刺激でもある。そこには、一つの知的・精神的世界が具現されているからである。

(法学部教授 今井 弘 道)

ゲルシンスキ文庫 (The Henryk Gierszynski Collection)

ゲルシンスキ文庫は 1830~1918 年のポーランドの独立運動、社会主義運動についての原資料であって、ポーランド近現代史研究にとって欠かせない。文庫はポーランドの歴史、政治、社会、思想、文学、言語、文化、風俗などの研究と教育に用いられる。文庫の資料は 1830 年から 1918 年に及んでいるが、それはなお外国の支配下にありながら、現代ポーランドの民族意識、政治組織、文学、風俗などの基本方向が形成されたきわめて重要な時期であり、わが国でいえば明治維新期に当たる。資料の形態は亡命政治家、知識人、学生などの発行した雑誌、パンフレット、書籍、集会の議事録、文書の草案、書簡、その他である。それは上記テーマにとってまさに恰好の資料である。北海道大学ではポーランド語、ポーランド文学、ポーランド史、ポーランド政治、ポーランド法、ポーランド経済についての授業が展開されており、ゲルシンスキ文庫の資料は十分研究と教育のために役立てることができる。

北海道大学はスラブ研究センター、文学部、法学部、経済学部、言語文化部に多くのポーランド研究者を擁し、おそらく一大学としては全国最大の集積を示している。またスラブ研究

センターの事実上の全国共同利用センターとしての性格から、全国各地のポーランド研究者との往来が盛んである。したがって研究資料への需要が大きく、とくに近現代史関係の資料への需要が大きい。ゲルシンスキ文庫は、両大戦間期の独裁者で、日本とも関わりの深いユゼフ・ピウスツキに指導されたポーランド社会党関係の資料を最も多く含んでいるが、それはスラブ研究センターのスタッフをはじめとするわが国の研究者が切実に必要としているものである。また同文庫はユゼフの弟でアイヌ研究者として名高いプロニスワフについての資料も含んでいるため、文学部の教官及び大学院等の研究者にとって必要である。

(スラブ研究センター教授 伊 東 孝 之)

北 の 古 典 籍

③

日 本 北 辺 地 図 の 研 究 書

今年は、有名なフランスの航海者ラペルーズが、南太平洋のサンタ・クルーズ諸島で非運の最期をとげてから、丁度200年目にあたる。その前年の1787年7～8月、彼はタタール海峡の兩岸を測量しているうちに、中国の「皇輿全覽図」に示されたサハリン島が北緯50度より遙か南方にのびていることを発見し、次いで宗谷海峡を通過することにより、オランダの航海者フリースの地図(1643年)にみられる巨大な「エゾ」が、実際にはサハリンの南半分と北海道を合体したものであることを確認した。17～18世紀中のヨーロッパでは、東岸のみが示されたフリースの「エゾ」とアジア大陸の関係について各人各様の解釈が行なわれ、日本北辺の地図は混乱を極めていたのである。それ故1796年に公表されたラペルーズの地図は、このような混乱に終止符をうつものであった。

わが国において北辺地図に画期的な変化が起り始めたのも、これとほぼ時を同じくしていた。天明5年(1785)に仙台藩の林子平が刊行した「蝦夷国全図」は、北海道以北のオホーツク海全域を示したわが国最初の地図であったが、そこではアムール河口の向いにサハリン島が描かれたばかりでなく、別に「カラフト嶋」を大陸に合体していた。そのことは林子平の利用した中国刊行の世界図が、フランスの地図学者ダンヴィユの北東アジア図(1752年版)にもとづ



高橋景保「日本北辺略図」(文化6年/1809)

いていたことを暗示する。翌天明6年には、老中田沼意次が蝦夷地に派遣した幕吏たちによって「蝦夷輿地之全図」が作成されたが、この地図において北海道は初めて実際に近く菱形のように描かれたほか、千島諸島は北海道とカムチャツカの間の長い列島となり、カラフトも従前のように再び一つの島としてあらわされた。幕吏たちは、北千島諸島についてはエトロフ島で出会ったイジュヨゾフというロシア人から情報を入手し、カラフト奥地についても同地の原住民の意見を採用したのである。その後寛政・亨和年間(1789-1803)には、松前藩士や幕吏たちによって北海道、南千島諸島、カラフト南部の実地測量がくり返し行なわれ、各地方の地図の輪郭は非常に精密に描き出され始めた。

このように日本人の関心が北辺に向けられ、これらの地方の地理的調査がすすんだとはいえ、奥地の状況についてはなお外国の文献や地図によらねばなかったのは当然である。しかし前述のように日本北辺についての認識は、当時の西欧、ロシア、中国においても混乱しており、そのいずれを採用すべきかについては比較研究の余地が残されていた。この問題について初めて検討を加えたのが、有名な蝦夷地探検家であり学者でもあった近藤重蔵の『辺要分界図考』(8巻、文化元年12月/1805年1月序)であった。彼はカラフト奥地、山丹、満州、北千島の地理を解明するために、内外の地図や文献のほか、わが国の調査隊が辺境において出会ったアイヌ、山丹人、ロシア人から得た聞き書きをも利用している。その結果作成された近藤の「今所考定分界之図」は当時としては出色の北辺図であったものの、ラベルーズの地図に比べると、カラフトとサハリンを別の島とみなし、沿海地方がほとんど直角に折れ曲っているなど従来の西欧図の欠点をそのまま受入れていた。さらに彼は地図中ではカラフトを離島として描きながら、本文中では「カラフトノ奥地ハ満州山丹ト地続也」と断定している。数年後に彼は「蝦夷地図式(坤)」と題する地図の中で、カラフトと大陸の関係について分離と接続の二様の図を示したが、それは亨和元年(1801)の高橋次太夫、中村小市郎の「唐太見分図」をそのまま借用したものである。

京都の地理学者で、文化4年(1807)若年寄堀田正敦に随行して蝦夷地を訪れた山田聯も、多数の内外の地図資料を比較検討して『北裔備考』(5巻、文化6年)という著作をあらわし、その中に「拙作蝦夷地略図」という北辺図の試図を掲げている。この地図では北海道と南千島諸島は文化初年までの幕吏たちの実測図により、また北千島やカムチャツカはロシア図にもとづいて描かれているので、いずれも非常に整った輪郭をもっている。しかしこの地図の際立った特徴は、不格好で巨大な北蝦夷(カラフト)である。彼はイギリスのアロースミス(1780年刊)によってサハリンとカラフトが同一の島であることを推定したが、文化元年(1804)にロシア使節レザノフが長崎にもたらしたロシア地図(ペトルブルク、我天明年刊ノ刊行)の正しさをも疑うことができなかった。サハリンとカラフトを別の島として描いたこのロシア地図は、実際にはダンヴィユの1734年版の写しにすぎなかったが、山田は北の隣国に敬意を払ったのである。そこで、彼はサハリンとカラフトが百年前には二島であり、近年になって砂州により結合したものと推論し、その結果ロシア地図にみる二つの島を機械的に合体し、さらに南端部分を日本側の実測図で補ったので、彼の北蝦夷は頗る奇怪な形とならざるをえなかったのである。

山田聯の北辺図における唯一の欠陥はカラフトにあったが、当時この問題に精力的にとりくんでいたのが幕府天文方の高橋景保であった。彼は『北夷考証』(文化6年)の中で、外国地図にみる「サガリーン」とわが国でいうカラフトの同一性を科学的に考証しているが、そのことは文化5年の間宮林蔵のカラフト探検報告からも裏付けをうることができた。松田伝十郎と間宮のカラフト派遣は、世界図新訂に着手していた高橋が西欧図における混乱を解決するため

楢 蔭

に幕府に要請したものという。それ故彼は『北夷考証』の中で自らの北辺図を描くに際して、カラフト島については山田聯のように外国地図に依拠することなく、間宮と松田の実測図を重視した。この地図は彼が同年中に銅版で刊行した「日本辺界略図」とほとんど同じもので、そこには間宮、松田の実測にもとづいて「北蝦夷」が描かれ、彼らの未調査部分は「皇興全覧図」のサハリンで補い点線で示されている。この地図においてカラフトは北海道および大陸に対して正しい位置に、かなりの正確さをもって描かれ、日本の北辺地図は完成の域に近付いたのである。しかしそこにはアムール河湾を驚くべき正確さで描いた間宮林蔵の文化6年の測量結果は未だ利用されておらず、さらにサハリン北東沿岸の補足のためにはなおロシアのクルーゼンシュテルンの実測図を待たねばならなかった。後年のシーボルト事件の悲劇は、このような北辺図の完成を目指した高橋景保の学問的熱意から起ったものである。

(北方資料室 秋月 俊 幸)

◆ 会 議

第137回 図書館委員会

く と き 昭和63年3月17日(木)>

く と ころ 附属図書館会議室>

議 題

1. 昭和64年度概算要求について
2. 理系分館について
3. そ の 他

第138回 図書館委員会

く と き 昭和63年6月1日(水)>

く と ころ 附属図書館会議室>

議 題

1. 昭和62年度決算について
2. 理系分館検討小委員会報告の取扱いについて
3. 昭和64年度学内共同利用逐次刊行物等について
4. 昭和63年度外国図書(大型コレクション)の選定について
5. そ の 他

第94回 教養分館委員会

く と き 昭和63年4月27日(水)>

く と ころ 教養分館会議室>

議 題

1. 昭和62年度図書費決算について
2. 昭和63年度図書費予算(案)について
3. 昭和63年度教官指定図書の選定について
4. そ の 他

図書担当掛長会議

く と き 昭和63年2月16日(火)>

く と ころ 附属図書館会議室>

議 題

1. 外国学術図書の購入について
2. そ の 他

国立大学図書館事務部長会議

標記会議が、昭和63年1月28、29の両日、千葉大学において開催された。この会議は、事務部長制をし

く、国立大学附属図書館の事務部長を以って組織されているもので、毎年1回開催されており、当館から酒井事務部長が出席した。

議題等は次のとおりである。

1. 外国学術図書等の整理について
2. ファクシミリの図書館活動利用について
3. 4週休制への対応について
4. 図書館業務の委託について
5. 各大学所蔵資料の遡及入力について
6. 外国学術図書の購入(昭和62年度補正予算によるもの)について
7. 図書館事務組織の再編・整備について
8. NACSIS-IRの導入について
9. 閉庁方式による4週6休制と大学図書館の利用者サービスについて
10. その他

北海道地区国立大学図書館協議会

くとき 昭和63年4月22日(金)>

くところ 帯広畜産大学>

議 題

1. 図書館職員の研修計画について
2. 電算化の実施状況及び計画について
3. 第35回国立大学図書館協議会総会関係について
4. その他

◆ 電算化ニュース

法学部関係図書を中心に95,601冊のデータを入力

—— 昭和62年度遡及入力作業結果 ——

図書業務電算化にともない、目録カードの作成は中止され、利用者は、昭和61年度以降受入れた新着資料は、オンラインで検索することになりました。しかし電算化以前に受入れた蔵書についても出来るだけ遡及人力をしてほしいとの要望が図書館委員会等からあり、図書館としても当面の重点事項として、この問題に本格的に取り組むこととなりました。このため、62年6月に各課から1名、計3名の職員により遡及入力作業班を結成して準備にはいり、8月から非常勤職員を採用して遡及入力を開始しました。

作業は、学情センター所有参照ファイルに該当する、和書1969年、洋書1968年以降(ロシア語、ハングル文字等の特殊言語は除く)出版されたものを対象に、センター所有ファイルにデータのあったものへの所蔵登録を中心に実施することとし、62年度は本館所蔵の法学部関係図書、開架閲覧室図書、参考資料室、北方資料室、書庫内図書(人文系部局からの管理換え分を除く)等ほぼ全館の資料について作業を終了しました。

この結果62年度には、テスト的におこなったオリジナル入力分を含め、対象資料冊数129,218冊の74%にあたる、和書66,892冊、洋書28,709冊、計95,601冊のデータを入力することができました。

入力作業の詳細な結果については、6月の図書館委員会で報告するとともに、各部局図書室にも報告書を送付しました。

なお、遡及入力は、今年度も経済学関係図書、教養分館開架図書等を中心に引き続き作業が進められております。

(遡及入力作業班)

図書情報システム運用部会

昭和62年度 第4回 昭和63年3月24日(木)

1. 議 題

- (1) 書誌構造の2層化に伴う記述の修正について
- (2) 「書誌・所在情報 DB 削除にあたっての申し合わせ(案)」について

2. 報 告 事 項

- (1) CLARK システム改良・修正要求の追加について
- (2) 会計ファイル中の分類記号エラー一覧表作成プログラムについて
- (3) 入力者 ID について

雑誌情報システム運用部会

昭和63年度 第1回 昭和63年4月20日(水)

1. 学術情報センターの雑誌目録システムを利用した雑誌書誌・所蔵データの作成について
2. 巻号ファイルの削除について

サービスシステム運用部会

昭和63年度 第1回昭和63年5月20日(金)

1. 議 題

- (1) 昭和63年度 サービスシステム部会のメンバーについて
- (2) システム管理部会への推薦者について
- (3) 研究室貸出図書リストの出力について

2. 報 告 事 項

- (1) クラーク入力者 ID と操作可否区分について
- (2) NACSIS-IR 等の代行検索のための大型計算機センターの利用について
- (3) 学術情報センター「NACSIS-IR 情報検索入門」(ビデオテープ)の貸出について

電 算 化 記 録 (7)

昭和63年2月～5月

年 月 日	事 項	年 月 日	事 項
63. 2. 1	北大オンラインシステムで北教大と接続、稼働開始	63. 3. 23	第8回北教大との接続に関する定期協議会
63. 2. 8	日本電気との定例打合せ会議(第32回)	63. 3. 24	62年度第4回図書情報システム運用部会
"	第7回北教大との接続に関する定期協議会	63. 4. 8	図書館事務部課名変更に伴い、学術情報課は情報システム課に変更
63. 2. 23	施設部にて、学情センター中村システム業務係長らによる「学術情報ネットワーク」説明会、益田学情課長、宇野情報処理掛長出席	63. 4. 18	日本電気との定例打合せ会議(第34回)
63. 3. 8	部課長会議で、63年度以降の遡及入力について打合せ	"	第9回北教大との接続に関する定期協議会
63. 3. 17	第137回図書館委員会で、64年度概算要求として、①CPUのレベルアップ、②CVCF(非常電源装置の設置)、③遡及入力、の3点を要求することを了承	63. 4. 20	63年度第1回雑誌情報システム運用部会
63. 3. 23	日本電気との定例打合せ会議(第33回)	63. 4. 28-5. 7	システム強化テストのため、コンピュータの使用休止
		63. 5. 12	学情センター田中業務部長、門田課長来館。遡及入力について見学
		63. 5. 20	63年度第1回サービスシステム運用部会
		63. 5. 26	日本電気との定例打合せ会議(第35回)
		63. 5. 26	第10回北教大との接続に関する定期協議会

データベース登録件数 (昭和63年6月1日現在)

1. 北大 DB 登録雑誌書誌件数

和 雑 誌	15,753	洋 雑 誌	16,389	計	32,142
-------	--------	-------	--------	---	--------

2. 北大 DB 登録図書書誌件数

和 書 書 誌	74,449	計	131,684 件	(DB 登録総冊数) 204,031 冊
洋 書 書 誌	57,235			

◆ 受 贈 図 書

本学教官著作物

〔本 館〕

○理 学 部

大野 公 男 (共訳) 新しい量子化学 下 Attila Szabo 等著 東京大学出版会 1988

高 田 誠 二 科学方法論序説 朝倉書店 1988

○工 学 部

井 野 智 (他) 基準課程図学 共立出版 1988

〔教 養 分 館〕

○理 学 部

高 田 誠 二 科学方法論序説 朝倉書店 1988

上見練太郎・勝股 脩・三宅敏恒 スタンダード微分積分学演習 共立出版 1988

◇ 人 事 往 来 ◇

○図書館委員会委員

青 柳 謙 二	(文 学 部	教 授)	63. 4. 1
狩 野 陽	(教 育 学 部	〃)	〃 (再任)
高 見 進	(法 学 部	〃)	〃
外 里 外譽郎	(医 学 部	〃)	〃
森 美和子	(薬 学 部	助 教 授)	〃
高 橋 芳 幸	(獣 医 学 部	〃)	〃
中 井 英 基	(教 養 部	〃)	〃 (再任)
渡 辺 洋	(言 語 文 化 部	〃)	〃
荒 又 明 子	(触 媒 研 究 所	〃)	〃 (再任)
柿 沼 光 明	(免疫科学研究所	教 授)	〃
高 間 浩 蔵	(水 産 学 部	〃)	63. 5. 1
嘉 数 侑 昇	(工 学 部	〃)	63. 6. 1

○退 職

酒 井 豊	事 務 部 長	63. 3. 31
岡 崎 きみ子	整 理 課	教養分館整理掛
根 田 美穂子	閱 覧 課	閱 覧 掛
高 木 靖 子	整 理 課	庶 務 掛
黒 沢 美 香	〃	受 入 掛
近 藤 純 子	〃	目 録 掛
米 澤 澄 江	閱 覧 課	参 考 調 査 掛
齋 藤 智 子	〃	教養分館閲覧掛
佐 藤 厚 子	〃	参 考 調 査 掛
		63. 4. 23

○採 用

竹 鼻 敏 治	学 術 情 報 課	学 術 情 報 掛	63. 4. 1
高 橋 真寿美	整 理 課	庶 務 掛	〃
飯 田 素 子	〃	受 入 掛	〃
小山田 晴 美	〃	目 録 掛	〃
佐 藤 厚 子	閱 覧 課	参 考 調 査 掛	〃
川 上 敦 子	学 術 情 報 課	学 術 情 報 掛	〃
濱 恵 子	閱 覧 課	教養分館閲覧掛	〃
我孫子 晴 美	情報サービス課	参 考 調 査 掛	63. 5.13

○転任・配置換

河 野 宏 光	学生課管理掛長 (整理課会計掛長)	63. 4. 1
田 中 一 郎	工学部総務課図書閲覧掛長 (整理課目録掛長)	〃
富 田 健 市	京都大学附属図書館整理課 (学術情報課情報処理掛)	〃
斎 藤 現太郎	事務部長 (静岡大学附属図書館事務部長)	〃
小 島 孝	整理課会計掛長 (獣医学部会計掛長)	〃
輪 木 安 雄	整理課目録掛長 (閲覧課教養分館閲覧掛長)	〃
堅 田 政 孝	閲覧課教養分館閲覧掛長 (教育学部図書掛長)	〃
佐 藤 透	文学部図書掛長 (歯学部総務課図書掛長)	〃
山 本 幾 夫	教育学部図書掛長 (理学部図書掛長)	〃
星 賀 隆	理学部図書掛長 (文学部図書掛長)	〃
和 田 章 憲	工学部総務課図書整理掛長 (同図書閲覧掛長)	〃
船 木 敏 美	農学部図書整理掛長 (工学部総務課図書整理掛長)	〃
矢 野 誠	農学部図書閲覧掛長 (同図書掛長)	〃
新 岡 弘	歯学部総務課図書掛長 (旭川工業高等専門学校庶務課図書係長)	〃
山 田 勉	医学部図書整理掛 (環境科学研究科図書室)	〃
坪 田 千江子	環境科学研究科図書室 (農学部図書掛)	〃
諏訪田 義 美	旭川工業高等専門学校庶務課図書係長 (医学部図書整理掛)	〃
佐々木 博 之	文学部庶務掛 (整理課目録掛)	〃
三 浦 淳	学術情報課学術情報掛 (薬学部会計掛)	〃
入 澤 秀 次	水産学部経理掛 (情報管理課会計掛)	63. 5. 1
小 山 千恵子	教育学部図書掛 (情報管理課教養分館整理掛)	〃
松 井 敏	情報管理課会計掛 (大型計算機センターシステム運用掛)	〃
午 来 信 子	情報管理課教養分館整理掛 (教育学部図書掛)	〃
松 野 とも子	情報システム課情報処理掛 (同課学術情報掛)	〃
福盛田 勉	文学部図書掛 (理学部図書掛)	〃
池 内 斐 子	文学部図書掛 (農学部図書閲覧掛)	〃
春 名 克 彦	理学部図書掛 (工学部総務課図書整理掛)	〃
山 田 達 雄	工学部総務課図書整理掛 (文学部図書掛)	〃
片 桐 和 子	農学部図書整理掛 (文学部図書掛)	〃

北海道大学附属図書館報「榆蔭」 (通巻75号)

1988年6月30日 発行 発行人 斎藤現太郎

編集委員 達 昭二 (長)・久原秀志 (図)・山口國雄 (図)・高砂 慶 (図)・片桐和子 (農)

宇野洋子 (理)・伊藤秀治 (獣医)

発行所 北海道大学附属図書館 札幌市北区北8条西5丁目 電話代表 716-2111 (2967)

印刷所 文 栄 堂 印 刷 所 札幌市中央区北3条東7丁目 電話代表 231-5560・5561